

元獣医の令嬢は婚約破棄されましたが、
もふもふたちに大人気です！

CHARACTER 登場人物紹介

メル

リン

イザベル

ファリン王国の伯爵令嬢。
ジェラルドを唆して、
ルナを国外追放させた。
ルナを見下している。

ジェラルド

ファリン王国の
王太子で
ルナの元婚約者。
世間知らずで
高慢な性格。

ルーク

アレクファートの側近。
心優しく穏やかな
青狼族の獣人。

アレクファート

獣人の国、
エディファンの第二王子。
獅子系の獣人で、正義感が強い。
ルナにつれない態度を
取りながらも
ピンチにはなにかと
助けてくれる。

ルナ

公爵令嬢として生まれ変わった
元アラサーのゲームオタク。
婚約破棄された上に
国を追放されたため
銀狼・シルヴァンと旅を始める。
実は知られざるチート能力
を持っている……

シルヴァン

ルナの相棒の銀狼。
神獣の息子で、
人間の言葉を理解する
ことができる。

スー

ルー

仲間の動物たち

旅の途中でルナの仲間になっ
た動物たち。
おちゃめな仕草で
ルナを和ませている。

プロローグ

「ちょよ！ ちょつと落ち着いて貴方たち！」

「『メェ〜』」

私に群がる羊たちを見て、友人の茜は呆れ顔をした。

「ねえ、詩織。あんたってほんと動物にはモテるわよね」

「……ちょつと茜、『動物には』ってどういう意味？」

私がそう言つて睨むと、茜は肩をすくめて舌を出した。

そして、二人で顔を見合せて笑う。

「でも意外だったわ。最初は、都会育ちのお嬢様獣医なんて、使えないと思つてたのにな。いつ逃げ帰るんじゃないかって噂してたぐらだから」

「おあいにくさま。すっかりこの生活が気に入つたし、悪いけど当分帰るつもりはないよ」

私は羊たちに囲まれながら腰に手を当てると、偉そうに言ってみる。

そしてもう一度、二人で笑い合った。

茜は、私が今、羊たちの検査に来ている牧場の娘。年齢は私より四つ下の二十五歳、日に焼けて

ボーイッシュな感じ。

最初はつんけんして嫌な女だと思ったけど、今では一番の親友だ。

大学を卒業して獣医になってもう五年。すっかりアラサーになった私は、北海道で暮らしていた。獣医師は命を預かる仕事だから、もちろん苦労や悩みはある。でも子供の頃から憧れていた仕事なので頑張れる。

「『メエ〜』」

私の膝ひざに頭をすり寄せ甘える羊たち。茜が言うように、私は何故か生まれつき動物たちに好かれるのだ。

私は群がるもふもふたちの検査を終えると、茜に言った。

「茜、それじゃあ私は行くわ。今日は他にも回らないといけない牧場が多いの」

「ええ、うちの子たちは少し残念そうだけだね」

「『メエ〜』」

「そんな顔しないでよ。貴方たち」

悲しげに私を見つめるもふもふたちは、とっても可愛い。

動物たちに囲まれていると幸せな気持ちになれる。やっぱり、獣医は私にとって天職なのかもしれない。

後ろ髪を引かれながら、彼らとお別れをする。そんな私を牧場の入り口まで送りつつ茜が言った。

「動物たちにはこんなにモテモテなのに、どうして男は寄りつかないのかな」

「あら、茜にだけは言われたくないけど」

「こら、詩織、言ったな！」

茜は拳こぶしを振り上げるふりをして笑う。

まったく、茜ったら。別に寄りつかないわけじゃないんだから！

以前付き合っていた男性はいたが、仕事柄遠距離になってしまっただけで結局別れてしまった。でも、今のところこの生活が気に入っているし、彼氏がいなくても毎日充実している。

そんなことを考えていると、茜が私に声をかけた。

「ねえ、詩織。仕事が終わったら『E・G・K』にログインするんでしょ」

「ええ、多分夜の七時ぐらいかな。茜は？」

『E・G・K』というのはエターナル・ゴールデン・キングダム〜永遠なる黄金の王国〜というオンラインゲームの略。

いわゆるMMOゲームで、バトルはもちろん生産も楽しめる人気のゲームだ。

茜に誘われて始めたんだけど、予想以上に楽しくてすっかりハマってしまった。小さい頃から結構ゲームが好きなのよね。

私の問いに茜が笑顔で答える。

「オッケー、私もそれぐらいにはインすると思うからよろしく！」

「了解！色々作りたい物もあるし、素材も取りにいかないかね」

私はそう返事をして茜に別れを告げると、車を運転して次の牧場に向かう。

この辺りは、隣の家に行くのだから車で移動しないと大変なのだ。大学に通うまで東京暮らしだった私には、こんな生活は想像もできなかった。

「あら？」

暫く車を走らせていると、ふと道路の向こうから車がやって来ているのに気づいた。見かけない車だ。観光客だろうか？

運転手に何かあったのか、蛇行運転している。

「駄目!!」

次の瞬間、私はそう無意識に叫んでいた。反対車線を走っていた車が、こちらをめぐがけて猛スピードで突っ込んできたのだ。かわすために急いでハンドルを切ったが、間に合わない。

凄惨な衝撃音がして、私は意識を失った。

——それが私の日本での最後の記憶。

日本でと言ったのは、気がつくまで私は、全く知らない別の世界に転生していたからだ。

私が生まれたのは神獣に守護された王国ファリーン。

その国の公爵家の令嬢ルナとして転生した。ちなみに婚約者はこの国の王太子である。

自分で言うのもなんだけど、アラサー獣医だった頃の面影はどこへやら、可愛いブロードヘアの少女に生まれ変わった。

そんな私が前世の記憶を思い出したのは、五歳の時。

初めは戸惑ったわ。だって、五歳の私の中にアラサーのもう一人の自分がいるんだもの。

でも、慣れると次第にそれが当たり前になった。

元の世界を懐かしむことはあるものの、ルナとして生きる自分を受け入れている。

ゲームが無い世界は少し退屈だったが、その分私は読書をして過ごした。

獣医だった頃の習性が抜けなくて、両親にねだって学者が読むような生き物の図鑑を買ってもらったりして。

だって、神獣や魔獣なんて存在がいる世界なんだから。幼い頃に凶鑑で彼らを見て、ワクワクしていたことを思い出すわ。

そんな風に悠々自適の暮らしを送っていたある日、私に大きな災いが降りかかった。



「ルナ・ロファリエル！ 貴様との婚約を破棄し、この国から追放処分とする！」

十六歳になってまだ間もないその日。

私は婚約者でこの国の王太子であるジェラルド王子から、理不尽な婚約破棄を突きつけられた。

それも、王宮で開かれた華やかな舞踏会のただ中で。

私は困惑を隠せないままに尋ねる。

「どうしていきなりそんなことを……？ 私、何か失礼なことをしてしまいましたか？」

静まり返る会場の主賓席でジェラルドは私を睨みつけていた。そして、その隣にはトルーデル

伯爵家の令嬢であるイザベルが笑っている。

輝くブロンズに艶やかな唇、赤いドレスを着た胸の大きな美女だ。

ジェラルドは私を罪人とはばかりに罵った。

「お前が犯してきた罪は、この麗しいイザベルがすべて教えてくれた。公爵家の令嬢であることを鼻にかけ、イザベルたちに数々の嫌がらせをしたというではないか？ さらにこの俺の婚約者であることも笠に着てな。虎の威を借るとんだ女狐だ！」

そして彼は、鋭い目つきで私に宣告する。

「ルナ、お前は俺に相応しくない！ 我が国を守護されている神獣セイランがごとく雄々しいこの俺にはな」

セイランというのは、この国を守護する神獣で、王家よりも力を持つ神に近い存在だ。

大きく美しい銀色の狼で、神殿に祭られており、人の前に姿を現すことは滅多にない。

イザベルはジェラルドに甘えるような声で言った。

「殿下、ルナ様は酷いのです。ジェラルド様の寵愛をいいことに、やりたい放題。王太子であられるジェラルド様が、いずれ国王陛下になられた暁には、国を傾ける悪妃となるのではとみな噂していますわ」

「お待ちください！ いつ私がやりたい放題をしたというのですか？」

そんな覚えは全くない。

でも、イザベルの言葉に彼女の取り巻きたちがわざとらしく頷いた。

「とぼけるおつもりですか？ 酷いお方！」

「ジェラルド様、イザベル様の仰るとおりです！」

「ルナ様の横暴には、私たちはもう我慢できません！」

「雄々しいジェラルド様と、この国を思えばこそ私たちはこうして申し上げているのです！」

イザベルはその白い手をそっとジェラルドの胸に添えると、涙を流して、体を預ける。

「ああ、いくらジェラルド様の心がルナ様に無いからといってこれまでの仕打ち、酷すぎますわ」

「ふん！ 可愛いお前を虐げるような女は許してはおかん。ルナよ！ 今すぐこの国から出ていくのだ!!」

ジェラルドの言葉に、ふふんと満足そうに笑うイザベル。

私はようやく理解した。要するに、二人はできているのだ。

イザベルは王太子の婚約者の座を私から奪いたかったのだろう。

そのためにジェラルドを籠絡して、裏で色々と手を回したに違いない。

イザベルは清楚でか弱いふりをして、さらにジェラルドに身を寄せる。

「ああ、ジェラルド様……あのような顔で私を睨みつけて。イザベルは怖くて仕方ないですわ」

よく言うわ。貴方がそんなしおらしいタイプじゃないのは知ってるわよ。

貴族の子息や令嬢が通う王立の学校では、令嬢たちを牛耳る裏ボスの存在だったもの。

「安心しろイザベル。あの女は、王太子であるこの俺の名でこの国から追放するのだ。もはや公爵家の令嬢ですらない！」

イザベルにたぶらかされて、その嘘も見抜けない男。私もそんな人と結婚なんてお断りだわ。「……分かりました。私はこの国から出ていきます。その代わり、実家の公爵家には手を出さないでください」

私はジェラルドを真つ直ぐに見つめてそう告げる。すると、彼は満足そうに笑みを浮かべた。「いいだろう、邪悪なのはお前だけだルナ。お前が黙って消えるのなら、公爵家まで罰する必要はない」

「……邪悪って！ 今まで婚約者だった私に、そこまで言う？」

「ありがとうございます。すぐに荷物をまとめて出ていきますので、ご安心くださいませ！」
心底腹が立って、私はその場を立ち去った。

そして家に帰ると旅支度をする。あんな人の顔は二度と見たくないもの。

事情を聞いてお父様は驚き、私に護衛を付けると言ったのだけれど断った。

「駄目よお父様。私の供になつた者は、一緒にこの国を追放されたことになってしまうもの。大夫、護衛はよそできちんと雇うから心配しないで」

「ルナ！ しかし、それではあまりにも……」

「ええ、ルナ、貴方があまりにも不憫だわ。いくら王太子といえども、よくもこのような無法な真似を。女性にだらしない方だとは聞いていましたが、この仕打ちはあんまりよ」

お父様に続き、そう言って泣くお母様。そんな二人を安心させるように私は微笑んだ。

「心配しないで。私、本当は前から世界を旅してみたかったの。あんな人の妻になるよりはずっと

いいわ！ スッキリしたぐらいよ」

お父様やお母様には悪いけれど、元々私には王太子妃なんて向いてない。

肩が凝りそうだし、それにジェラルドは傲慢で嫌な男だもの。

「ルナ、貴方ったら……本当に不思議な子なんだから。どうか、無事に帰ってきて頂戴。貴方の処分が取り消されるように、私たちも力を尽くすわ」
不思議な子か。そうよね、前世も含めたら私の方がお母様よりも長く生きているし。

「ありがとう、お母様。でも無理はしないで」

私は町娘の格好をし、旅支度を終えたと屋敷の玄関前に立った。

すると、どこからともなく美しい銀色の毛並みをした狼が現れ、私の膝に頭を擦りつけた。

あまり人に懐くことがない狼だけれど、この子は私にとても懐いている。お母様はその狼の頭を撫でると微笑んだ。

「シルヴァン、ルナを守つてね。神獣と同じ銀色の狼、きっと貴方はセイラン様からの加護を受けているのでしょう」

シルヴァンと呼ばれた雄狼は、まるでその言葉が分かっているみたいにコクリと頷く。

実は、この子にはちよつとした秘密がある。私が彼の頭を撫でると、シルヴァンは口を開いた。

『しかし馬鹿だよな、あの王子。ルナを追い出したって父さんが知ったら、ただじゃ済まないぞ。神獣の息子である僕を助けてくれたのは、ルナなんだからさ』

そう、彼は神獣セイランの息子なのだ。悪戯好きで、子狼の頃神殿を出て遊んでいたところ怪我

をってしまった。

そんな彼を偶然見つけ、治療したのが当時まだ幼かった私。以来ずっと彼は私の傍にいる。

『今更言っても仕方ないわ。あんな人のこと、セイラン様に言いつける真似はしたくないしね。婚約破棄できてせいせいしてるくらいよ』

前世の記憶が蘇った私には不思議な力があつた。

その一つが、動物と話せる力である。

『まあいいや。僕はルナと一緒にいられたら、どこだって幸せなんだから！ ルナと二人で旅ができるなんて嬉しいな』

そう言つて、シルヴァンはもふもふした尻尾を私に向かって大きく振る。

その姿が本当に可愛くて、私は思わず彼の体をギュッと抱き締めた。銀色の毛並みが心地よい。

『シルヴァン、ほんとに貴方は可愛いんだから！ 大好きよ！』

『へへ、僕だってルナが大好きさ！』

私にとってシルヴァンは弟みたいな存在だ。

このもふもふが隣にいれば生きていける。

ジェラルドのせいで、しょんぼりなんてしてられないわ！

私はシルヴァンを抱き締めながら、グツと拳に力を込める。

そんな私たちを見つめながら、お母様が首を傾げて言う。

「いつも思うのだけれど、貴方たち、まるで本当に話しているみたいね」

「ふふ、だから言ってるでしょう？ 私は動物の言葉が分かるって」

「もう、こんな時まで貴方つて子は」

無邪気に笑つてみせた私に、お母様は呆れまじりに微笑んだ。

私はこうして、シルヴァンと一緒に旅に出た。

この後、ジェラルド王子がとんでもない目に遭うことなど知りもしないで――



「ふざけるな！ それでは貴様は、ルナをこの国から追い出したというのか!!」

ルナが王国ファリオンを去った数日後。王都から離れた聖地では、神獣セイランの激怒の咆哮が、彼を祭る大神殿を震わせていた。

人間の言葉を話すことができるのは、彼が神獣だからである。神殿を訪れていた国王や王妃は震え上がった。

まるで月光のような美しい銀色の毛並みの大きな狼が、彼らを見下ろしている。

だが、国王の傍にいる王太子ジェラルドは、したり顔でセイランに申し出た。

「セイラン様はご存じないのです、あの女は恐るべき悪女。それはここにいる清らかなる乙女イザベルがよく知っております」

「はい、セイラン様。あの女はジェラルド様には相応しくありませんわ」
ジェラルドは、自分を睨にらんでいる巨大な狼に胸を張る。

「この度は、このイザベルを私の新しい婚約者にすることもご報告したくて参ったのです。あんなつまらない女を追い出したことなど、お忘れください」

ギリッとセイランが牙を鳴らす音が神殿に響く。

凄まじい殺気が神殿に満ちるのを感じて、護衛の騎士たちは怯おびえた。

「……貴様、ルナをつまらない女だと抜かしたな？ お前たちは知らぬだろうが、ルナは我が息子の命の恩人だ。貴様のような下らぬ男でも、いずれはこの国の王になると思えばこそルナとの婚約の儀を許した。それを追い出したなどと」

その言葉を聞いて、国王と王妃は目を見開いた。

「セイラン様のご息様の恩人!?」

「ルナがですか!？」

「そうだ。ルナはかつて、幼き息子の命を救った。その子狼が、神獣である我の子だと知りもせずにな。それを知った後も、決して見返りなど求めなかった。心優しき娘よ、それ故に我が息子はルナの傍を離れようとはせん」

国王と王妃はハッとして呟く。

「ま、まさか……ルナの傍にいつもいた、あの狼が」

「セイラン様のご息様だと」

セイランは国王たちを見下ろして咆哮する。

「貴様らは、我が恩人と息子をこの国から追い出したのだ！ 絶対に許せん!!」

巨大な狼の前脚が、ジェラルドの体を押さえつける。そして、その鋭い牙が彼の頬に突きつけられた。

セイランがひと噛みすれば、ジェラルドの命は無いだろう。

「ひ、ひいひい!!」

先程までしたり顔で胸を張っていたこの国の王太子は、真っ青になって情けない悲鳴を上げる。

隣にいるイザベルは、尻もちをついて泣き叫んだ。

「お、お許しくださいセイラン様！ わ、私は関係ありませんわ、王太子殿下がお決めになられたことです!!」

「い、イザベル、そなたが望んだからではないか!」

ジェラルドの言葉に、イザベルは激しく首を横に振ると叫ぶ。

「嘘を仰らないで！ 私はなんの関係ありません！ 婚約の話も無かったことにしてください!!」

「お、おのれ！ イザベル!」

見苦しい二人の言い争いを眺めながら、セイランは嘲笑あざわらって言った。

「愚かな男だ。ルナを追い出し、このような卑しい心の女を妻にするつもりだったとはな」

国王と王妃は床に頭を付けて願ひ出る。

「セイラン様！ 愚かな息子をどうかお許しください」

「せめて、命だけは！ ルナは必ず呼び戻します。ジェラルドに頭を下げさせて、必ず呼び戻させますから！」

セイランは、国王と王妃を見つめた後、ジェラルドを睨みつける。

「……いいだろう、一度だけ機会を与えてやる。必ずルナを連れ戻せ！ 貴様がその薄汚い頭を地面に擦りつけて、ルナに詫びるところを見ねば気が済まん！」

「ひ、ひい！ 必ず、必ずルナを連れて参ります!!」

セイランはイザベルに告げた。

「貴様も同罪だ！ すぐにこの国を出て行け。ジェラルドと共にルナを連れ帰るまで、この地を踏むことは許さん」

「そんな！ すぐにだなんてあんまりですわ、セイラン様！」

イザベルはセイランに必死に願ひ出るが、神獣は聞く耳を持たない。

「黙れ！ お前たちがルナにしたことを思えばそれでも生ぬるい。それとも、ここで我が牙の餌食となるか？」

「ひっ！ す、すぐに参ります！ どうかお許しを」

ジェラルドが叫ぶと、彼とイザベルの足元に魔法陣が現れた。神獣であるセイランが描き出したものだ。

すると、二人の額に黒い紋様が浮かび上がった。

「それは、我と誓いを為した証。どこにしようと我にはそなたらの居場所が分かる。逃げられると
思うなよ」

「ひっ！」

「に、逃げたりなど致しません！」

結局この日、ジェラルドとイザベルはその身分を剥奪され、国外に追放された。

同時にルナの捜索隊の指揮を取るように命じられたのである。

「おのれ！ 尊い王太子であるこの俺がどうして！」

「まだそんなことを言っているのですか？ 馬鹿な人。ルナを連れ帰らなくては私たちは死ぬんですよ」

「黙れ！ イザベル、この性悪女め！」

ジェラルドの言葉をイザベルは鼻で笑う。

「もう王太子ですらない貴方に、興味は無いわ。それに私はルナに頭を下げるなんてまっぴら！
他に生き残る方法はあるもの」

伯爵家が用意した護衛騎士に囲まれてほくそ笑むイザベル。

そんな彼女に、ジェラルドは苛立った様子で問い返した。

「どういふことだ、イザベル！ 他に生き残る方法とは一体なんだ？」

イザベルはじつとジェラルドを見つめると、吐き捨てるように言った。

「貴方みたいな無能者に教えるのは御免ですわ」

「な、なんだとっ……!!」

イザベルは顔を真っ赤にして叫ぶ。ジェラルドを無視して、自分が乗る馬の向きを変える。そして、忌々しげに爪を噛んだ。

「ルナ……私をこんな目に遭わせて。覚えてなさい。このままじゃ済まさないわ」

第一章 森の中で

『ねえ、シルヴァン。どう？ 見つかった？』

ジェラルドとイザベルの理不尽な仕打ちにより、ファリーンを飛び出してから数日後。

私はとある森の中にいた。新鮮な空気が嫌なことを忘れさせてくれる。

堅苦しい公爵家の令嬢をやめてせっかく旅に出たんだもの。心機一転、楽しまなくっちゃ。

そう思っていたんだけど、実は今、私とシルヴァンはこの森の中でちょっとしたものを探していた。

木々の間を抜けて、切り立った岩の崖の前に来ると、シルヴァンの鼻がヒクンと動く。

くんくんと匂いを嗅ぎながら、シルヴァンのもふもふとした尻尾が揺れる。

『ルナ！ あれじゃないか!?!』

『見つけたの？ シルヴァン』

『ああ、ずっと匂いはしてたんだ、間違いないさ!』

そう言っつて、大きな耳をピンと立てるシルヴァンは、目の前にある崖を華麗にジャンプしながら駆け上がったいく。

そして、崖の中腹に生えていた草を口に咥えてこちらに下りてきた。

『凄いわシルヴァン、流石ね!』

『へへ、任せとけつて』

私が思わずその首にギョッと抱き着くと、シルヴァンは嬉しそうに尻尾を左右に振る。その姿が本当に可愛くて、私は抱き締める力を強めた。

すると、私の肩の上に小さな動物が素早く上ってきた。

『ルナ、ルナあ！ 私も見つけたよ!』

そう言ったのは、つぶらな瞳と白く大きな耳を持った愛らしい子リス——白耳リスのリンだ。

さっきこの森で出会って、友達になったのよね。

リンが小さな手に持っているのは、どんぐりに見た目がよく似た木の実。

『ありがとうリン！ 助かったわ』

『えへへ、頑張ったんだから』

私が指先でリンの頭を撫でると、リンは気持ちよさそうな顔をする。

『ミルファンナの薬草とカリンナの実、これがあればなんとかなりそうだわ。シルヴァン、リン、



「彼女」のところに戻りましよう」

『ああ。ルナ、早く僕の背中に乗って!』

『うん!』

シルヴァンに促され、私は彼の背中に飛び乗った。

しなやかなその体は、鞍くらも無いのに、馬よりもずっと乗り心地がいい。

流石さすが、神獣の子供だ。

『ねえ、シルヴァン。私、重くない?』

『へへ、軽い軽い! ルナ一人なんて、へっちゃらさ!』

よかった。聞いてはみたものの、シルヴァンに真顔で『重いよルナ』とか言われたら少し落ち込みそうだったから。

シルヴァンの言葉に、リンは私の肩の上で少し頬を膨ふらます。

『一人じゃないもん、リンだっているんだから!』

『ふふ、そうよねリン』

『そうだったな。二人とも、しっかり掴つかまってるよ』

森の中を飛ぶように駆けていくシルヴァンに乗っていると、思わず声が出てしまう。

『うわあ、凄い凄い!』

凄まじいスピードで流れていく景色は、ジェットコースターなんかよりもずっと迫力がある。

ちなみに、ここはもう故郷のファリーン王国じゃない。シルヴァンのおかげで昨日から、ファ

リンの東にあるエディファンという国に入っていた。

エディファンは獣人の王国で、前から一度来てみたかったのよね。
ファリーンには、殆ど獣人はいないから、ぜひ会ってみたくて。

エディファンに入って街道沿いに行くと、人目もあつてシルヴァンの背中に乗れないから、森の中を通っていた。そこで出会ったのが白耳リスのリン。

森にある泉のほとりで、シルヴァンと休憩をしていた時にリンと出会った。

木の枝の上でしょんぼりとして元気が無かったから声をかけたんだけど、最初リンはとても驚いていた。

それはそうよね、人間に声をかけられたんだから。

でも私たちはすぐに仲良くなつて、リンからあることを頼まれたのだ。

それを果たすため、私たちはリンと会った泉のほとりに戻ってきていた。

『着いたぜ、ルナ』

『ええ。ありがとう、シルヴァン』

シルヴァンに礼を言っていると、ふとリンの尻尾が私の頬に触れた。

驚いて見れば、リンの耳が不安げに垂れ下がっている。その手には、大事そうにしっかりとカリナの実が握られていた。

『ねえ、ルナあ……ママ治るかなあ』

『リン、そんな顔しないで。私たちもできる限りのことをするから』

『うん！ ありがとう、ルナ』

リンはそう言つて大きな尻尾を振りながら、私たちの前に生えている一本の木を駆け上がった。
いく。

そして、その幹に空いた小さな穴の中に姿を消した。

あそこがリンの家なのだ。暫くすると、ぐったりとしたリスがリンと一緒にそこから姿を見せる。
リンの母親のメルだ。

『シルヴァン、お願い。さつきよりも元気が無いみたい、急がないと』

『ああ、分かった！ ルナ』

シルヴァンは頷くと、軽やかに地面を蹴つてリンたちの傍の枝に立ち、二人を頭の上に乗せる。
そして、ふわりと私の横に着地した。

シルヴァンは、リンと母親のメルを柔らかい草の上にそつと下ろす。

『ママ、ママ！ しつかりして』

『リン、泣かないの……私が死んだら、貴方は一人で生きていかななくてはいけないのよ』

『やだもん！ そんなのやだあ！』

まるで駄々っ子のようにそう言つて、メルに体をすり寄せるリン。

メルの全身には赤い斑点ができています。これは白耳リスに特有の病気だ。

メルは苦しげに顔を歪ませながら、ルナに言う。

『カリナの実でよくなると思つて昨日も食べてみたのですけど……。ルナさんありがとう。自分

の体のことは自分が一番分かるわ、もう長くないって』

『諦めないでメル、私が必ず治すわ!』

この病気の治療にはカリンナの実が効く。メルたちも本能的にそれを知っているのだろう。だが、場合によっては進行が早くて、とてもカリンナの実だけでは治らないことがある。

『ルナ』

シルヴァンが崖で採ったミルファンナの薬草を啜らせて私に渡す。

『ありがとう、シルヴァン』

この薬草はカリンナの実の効能を強めてくれる。

シルヴァンは真剣な表情で私に言った。

『普通に薬を作っている暇は無いな、ルナ』

『そうね、シルヴァン。それじゃあ間に合わない。【E・G・K】の力を使うわよ!』

私は、シルヴァンが差し出したミルファンナの薬草とカリンナの実を手には、静かに口を開いた。

『E・G・K、レンジャーモード発動』

私がそう言うと、目の前に様々な文字が並んだ半透明のパネルが現れた。よくゲームで見る、ステータス画面のようなものだ。そこにはこう記されている。

名前…ルナ・ロファリエル

種族…人間

職業…獣の聖女

E・G・K…レンジャーモード(レベル75)

力…315

体力…327

魔力…270

知恵…570

器用さ…472

素早さ…527

運…217

物理攻撃スキル…弓技、ナイフ技

魔法…なし

特技…【探索】【索敵】【罨解除】【生薬調合】

ユニークスキル…【E・G・K】【獣言語理解】

加護…【神獣に愛された者】

称号…【獣の治癒者】

——私には、動物と話せること以外にも不思議な力がある。

それは、私が元の世界でハマっていた『E・G・K』の、さまざまなキャラクターの力を使うことができる能力だ。

私は今、そのレンジャーの力を選択している。

『職業』の下に書かれている『E・G・K・レンジャーモード』というのがその証。

あのMMOゲームの中では、弓やナイフを扱うのが得意な職業だ。でも、私が今この職業を選んだのはそれが理由じゃない。

レンジャーの特技の一つ、薬草などを素材にして薬を作る力——【生薬調合】を使うためだ。ちなみに、私が持っているそれ以外の力もステータス画面に反映されている。

【獸言語理解】は文字どおり動物たちの言葉を理解できる力、【神獸に愛された者】はセイラン様に加護を受けている証である。

【獸の治癒者】は動物たちを治癒する力を高めてくれる、元獣医の私にはもってこいの称号だ。

私は特技の一つ、【生薬調合】を使うため叫ぶ。

「特技、【生薬調合】を選択！」

私の言葉に反応するように、先程現れた半透明のモニターに文字が映し出される。

〈【生薬調合】を選択しました。称号【獸の治癒者】の力でスキルが変化します。構いませんか？〉
「ええ、構わないわ。やって頂戴！」

〈分かりました。特技【生薬調合】が変化、【獸薬調合】が発動。生薬を調合し、獸に対しての特効効果を付与します〉

私は、ミルファンナの薬草とカリンナの実の上に右手をかざした。すると、地面の上に黄金の魔法陣が描かれていく。

「いくわよ！ 【獸薬調合】!!」

黄金の光が薬草とカリンナの実を包み込む。リンはそれを見て驚いたように目を見開いた。

『きゃー！ ルナ、なんなのこれ?!』

光が消えると、薬草と木の実は無くなり、私の右手には淡い光を放つ小さな丸薬だけが載っている。

私はそれをリンに渡した。

『リン、これをメルに飲ませてあげて』

『う、うん。ルナ』

リンはまだ目を白黒させていたけど、母親のメルに薬を飲ませる。

薬を口に含むと、弱りきったメルの喉が弱々しく動いた。丸薬から放たれる黄金の光が、ゆっくりとメルを癒していく。

『ママー！ ママー！』

心配そうなりんの頭をシルヴァンがそっと舐めている。

私はシルヴァンの体をギュッと抱き締めて、メルの回復を祈った。

みんなでメルの様子を固唾を呑んで見守っていると、淡い光が消えていくのと同時に、メルの体の赤い斑点が消える。それを見てリンが叫んだ。

『ルナ！』

私はメルのおさふさの体毛を触りながら、地肌からその斑点が無くなったのを確認した。

『ええ、もう大丈夫よ！』

メルは自分の体を驚いたように眺めた後、涙を流して私を見つめた。

『ああ、まさかこんな……ありがとうございます！　ありがとうございます!!』
体をすり寄せ合うメルとリン。

そして、リンは嬉しくて仕方ないといった様子で私の周りを走りまわる。

『ルナありがとう！　大好き!!』

そう言っただけで私の体を駆け上がる、私に頬ずりをする。

リンの最大の感謝の気持ちだろう。私も嬉しくて、リンの頭を優しく撫でた。

メルは私たちに何度も頭を下げて言った。

『ルナさん、貴方は私たちにとって女神様です！　本当にありがとうございます。このお礼はきっと致しますわ』

『女神様だなんてオーバーよ、メル』

私の言葉にシルヴァンが頷く。

『そうそう、女神にしてはルナはお転婆だもんね』

『もう！　シルヴァン、それどういう意味？』

『へへ、だってそうだろう？』

私が頬を膨らますと、メルとリンは顔を見合わせて笑う。

それを見て、私とシルヴァンも思わずつられて声を上げて笑った。

とにかくよかつたわ、手遅れにならなくて。薬草が見つかるのがもう少し遅かったら、どうなっていたか分からない。

傷を塞いだりするだけなら『E・G・K』のヒーラー系の職業にモードチェンジしたらなんとかなるけれど、病気はそうはいかないのだ。

ミルファンナの薬草とカリンナの実が無ければ、【獣薬調合】だって使えなかった。

『薬草とカリンナの実を探してくれた、シルヴァンとリンのお手柄ね!』

メルはそれを聞いて、二人にお礼を言った。

『シルヴァンさん、ありがとうございます。リン、ありがとう』

『えへへ、だってママに元気になって欲しかったんだもん!』

『気にならなくて。僕も昔、ルナに助けてもらったことがあるんだからさ』

シルヴァンの言葉に思わず昔を思い出す。あの時は大変だった。

『E・G・K』のヒーラーの力で取りあえず傷は塞いだものの、感染症を引き起こし、酷く化膿していたのだ。

両親に頼んで必要な薬草を集めて薬を作り、弱ったシルヴァンに少しずつ飲ませたのよね。

メルよりも酷い状態だったから、元気になるまで数日つきっきりだった。

私が見つけるのがもう少し遅かったら、助からなかったかもしれない。

リンが私を見つめて首を傾げた。

『ルナ、どうしたの？ 目が赤いよ』

『ふふ、ごめんねリン。なんでもないわ、シルヴァンと出会った時のことを少し思い出してたの』
やだ、シルヴァンが死んじやってたらって思ったら涙が出てきた。

シルヴァンは私の家族だもの。いないなんて想像もできない。

そんな私の顔を見つめて、シルヴァンは照れたように言った。

『目が覚めてさ、ちっちゃなルナが涙を一杯浮かべて僕を見てたんだ。そしてそっと抱き締めてくれて……なんだかその時、ルナが小さな女神様に思えたんだ』

私はシルヴァンをギュッと抱き締める。

『あら、こんなお転婆な女神はいないでしょ？』

私がシルヴァンの顔に頬を寄せると、彼は照れているのかツンとソッポを向く。

このツンデレさが、いつも私の心を鷲掴みにするのだ。

私はシルヴァンのもふもふした毛並みを心ゆくまで堪能する。

すると、リンが何かを思い出したように私に言った。

『そだルナ！ ルナに見せたいものがあるの』

『私に見せたいもの？ なあにリン』

『待ってて！ 取ってくるから』

そう言っ、リンは彼女たちの家がある木に登っていく。そして巣穴から小さな光る玉を持って

こちらに下りてきた。

それから愛らしい顔で私を見上げると、それを小さな両手で私に差し出した。

『ルナ！ これあげる、リンの宝物なの』

それは、まるで宝石みたいに綺麗な石だった。光を浴びて虹色に輝いている。

『あら、綺麗ね。でもいいの？ リンの宝物なんでしょ』

『えへへ、いいの。ルナに持っていて欲しいんだもん！』

もしかすると、誰かが昔アクセサリーに使っていたものかもしれない。

でも、宝石にしては見たこともない不思議な色だ。石は綺麗に磨かれ、そのふちには紐を通す小さな穴が開いている。

『不思議な石ね。リン、どこで見つけたの？』

『えっとね、リンがこの泉のほとりで見つけたの。最初は泥だらけだったのよ。でも、ちよつとだけ綺麗なところが覚えてリンが一生懸命磨いたの』

誰かがここに捨てたのかな？ こんなに綺麗なのに勿体ない。

『へえ、そうなのね。リンが磨いたのね』

『うん、どんどん綺麗になるのが楽しくて！』

こちらをキラキラとした目で見上げるリン。自分の宝物に、私が興味を持ったことが嬉しいみたい。

リンの宝物を貰うのは少し気が引けるけど、断ったらかえってがっかりするよね。せつかくの贈

り物だもの。

私はリンにお礼を言った。

『ありがとうリン。大事にするわ！』

『うん！ ルナ！』

私の周りを嬉しそうに駆けまわるリン。

近くの町に行ったら、紐を買ってこれに通してみよう。ネックレスにしたら素敵かも。胸を躍らせつつ石を眺めていると、メルは私に乞うように言った。

『ルナさん、私にもお礼をさせてください。私に何かできることはありませんか？』

『いいのよメル。気にしないで』

私がそう言うと、メルはしょんぼりする。

『命を救って頂いたんです。何もお礼ができないのでは申し訳なくて』

そんなメルを見つめながら私は答えた。

『分かったわメル。じゃあ、一つお願いしたいことがあるの』

『なんですか、ルナさん！ なんでも言ってください』

私はメルに願い事を言うと、メルは頷きながらそれを聞く。

『どうかしら、お願いできる？』

『はい！ それでしたら、うってつけの相手を知っていますわ。私に任せてください』



あの後、私はメルに案内されてとある場所を訪ねていた。

私が切り株の上に腰を下ろしていると、膝の上にリンが駆け上ってくる。

『ねえ、ルナ。持ってきたよ！』

『ふふ、ありがとうリン』

私の膝に小さな白い花を置くリンに、私は笑みを向けた。

『わたしも、わたしも！』

『これでもいいのお？』

そう言ってリンと同じ花を置いたのは、羊のような角を生やした白いうさぎだ。

羊うさぎのスーとルー。二人は姉妹で、リンとも仲良しみたい。

本で絵を見たことがあるけど、実際に見るのは初めてだわ。

ぴよんぴよん跳ねる白うさぎの頭にある丸まった角が、なんとも愛らしい。

リンがスーの頭の上に乗っているのが可愛くて、思わず抱き締めたくなる。

『ありがとう、スー、ルー！』

『えへへ、褒められちゃった』

『ルーたち、いっぱい咲いてるところ知ってるんだから！』

私とはさつき知り合ったばかりなのに、優しい二羽はリンと一緒に私が頼んだ花を摘んでくれた。

彼女たちについて行ってくれたシルヴァンも戻ってくる。シルヴァンの口にも、白い花が啞えられていた。ハルミルラの花だ。

本当は私も一緒に花を摘みに行くつもりだったんだけど、ある事情でここを離れることができなかった。

私はその花の上に手をかざして【獣薬調合】を使う。そして、出来上がった丸薬を大きな葉っぱの上に置く。

リンたちが沢山摘んできてくれたから、おにぎりぐらいの大きな丸薬ができたわ。

だって、相手が相手だから。これぐらいのサイズじゃないと効きそうもない。

——そして、その『相手』は今、私のことを睨んでいる。

『少し時間をくれというから何かと思えば、人間よ、これは一体なんのつもりだ？ 気が済んだなら出ていけ。ワシは人間など信用しておらんと言っただけだぞ！』

それを聞いてメルが彼に言った。

『バルロン様、ルナさんは特別です！ 私の病気だって治してくれたんですから』

私たちの前に、どつしりとうずくまっているのは大きな大きなイノシシだ。

ジャイアントボアという魔獣で、本で読んだよりも遥かに大きい。私が元いた世界でいえば、小さなトラックぐらいはある。

魔獣というのは普通の獣とは少し違う、珍しい生き物なのだ。

魔獣の中でも長く生き特別な力を持った個体は、聖獣や神獣と呼ばれるようになることもある。

セイラン様みたいな神獣になれるのはよっぽどのことだけだね。

メルが紹介してくれたのが彼、ジャイアントボアのバルロン。この森の主だって聞いている。

せっかくメルやリンと知り合ったのだから、この森の動物たちにもっと会えないかしらってメルに相談したのよね。

するとメルに、それならまずは森を治める主のバルロン様に会って欲しいって言われて、ここに来たのだった。

その大きな体と牙で、外敵からこの森を守っているそうだ。口元にある、まるで象牙のような牙はとても立派。

メルは彼に私を紹介してくれたものの、バルロンは人間は嫌いみたいで、すぐに出ていけと言われてしまった。

仕方ないと思って立ち去ろうとしたんだけど、気になることがあって……

私はバルロンに尋ねる。

『怪我をされてますよね？ それも酷い怪我を……さつきから立とうともしないもの。痛みを耐えているのでしょうか？』

『黙れ！ 余計なお世話だ！ 人間の小娘め!!』

バルロンは巨大な体を揺らしながら立ち上がると、私を睨みつけた。

その迫力に、メルヤリン、そしてスーたちも縮こまる。

しかし、すぐにバルロンの巨体は横倒しになった。

無理に立つたからだろう。立ち上がった時に見えた足は、やはり酷い傷を負っていた。

『ぐぬううー！』

『やっぱり……。私なら貴方を治せます。傷を塞いだ後、この薬を飲めば化膿止めになるの。出ていく前に治療だけはさせてください』

『……断る。これは人間どもに付けられた傷だ。それを人間のお前に治してもらおうなどと』
バルロンの言葉に、私は首を傾げた。

『どういうこと？ 魔獣は珍しい生き物だもの。獣人の王国エディファンでは保護されてるって聞いたわ』

すると、いつの間にか、傍の木の上に座っていた小さな白い猿——ジンが私に言った。

『なんだよ知らないのかい？ 密猟者さ、ジャイアントボアの牙は高く売れるからな。バルロン様は強いから、今までは密猟者も手を出せなかつただけけど……』

『密猟者？』

私の問いに頷いて、ジンは続ける。

『俺は人間に飼われてたことがあるから、連中の言葉が分かるんだ。隣の国の王子様が新しい婚約者を迎えるんだってさ。そのために、一番立派なジャイアントボアの牙を取ってこいって命令したんだって。凄い大金が貰えるそうだけ。俺が人間の言葉が分かるなんて知らずに、ベラベラと喋ってたよ』

てたよ』

シルヴァンが心底嫌そうな顔をして私に言った。

『おい……。ルナ、その隣の国の王子ってもしかして』

『ええ、多分ジェラルドだわ。そんな馬鹿な命令をする隣国の王子なんて、あいつぐらいだし』

イザベルを婚約者にするかどうかは、もう私の知ったことじゃないけれど、一国の王子が密猟を指示するなんて！

ファリーンでも、ジャイアントボアの牙の取引は禁じられている。

それを使って作られた調度品は、裏では貴重品として取り扱われているって噂を聞いたことがある。でも、王太子が自ら法を破るなんて考えられない。

エディファンとファリーンは同盟国なのに、こんなことが分かったら両国の関係だって悪くなるに決まってる。

他国の王子が、エディファンでこんなことをさせていたなんて知ったら、獣人の王だって激怒するはず。

一体何を考えてるの、あの馬鹿王子は！

『ぐぬ、密猟者ごときにこのワシが不覚を取るとは。あの獣さえ連中に味方をしておらねば……』
悔しそうにそう言って、牙を打ち鳴らすバルロン。

『あの獣って？』

不思議に思った私が、バルロンに問いかけたその時——

シルヴァンの耳がピンと立つ。私も思わず身構えた。

『ルナも感じたか？』

『ええ、今はレンジャーモードだから。【素敵】に確かに反応したわ』

強い悪意を持った人間が三人、そして、大きな獣が一头、こちらに近づいている。

森の主であるバルロンも感じたのだろう、再び立ち上がるうとしたけれど、うめき声を上げてうずくまってしまった。

『ぐぬ！ 連中め、追い返したと思ったがまた来おったか。おのれ、体の自由も利かぬとは情けないことよ』

敵のいる方向を鋭く睨みながら、シルヴァンは私に言った。

『どうするルナ？ 連中、どんどんこっちに近づいてくるぞ』

『ええ……』

不安げなメルとリン、そしてスーたち。

『バルロン様！』

『ママ、怖いよお』

『スー、わたしたちどうなるの？』

『そんなの、分かんないよルー……うえ、うえええん！』

泣き出す羊うさぎたちを前に、私はシルヴァンに言った。

『シルヴァン、行きましよう。このままにはしておけないわ！』

私の言葉にバルロンが声を上げる。

『待て小娘！ 本当にお前の言うとおりにすれば、この怪我が治るのだな？』

『ええ、でも時間が無いわ』

『分かった、この傷を治してくれ！ ワシはこの森の主だ、みなを守らねばならぬ』

泣いているスーたちを見て奮い立ったのか、力強くそう告げるバルロン。そんな彼に私はしっかりと頷く。

『もうそこまで迫ってきてる！ すぐに治療にかかるとわよ』

『分かっている！』

バルロンの言葉に私は再び頷くと『E・G・K』の力を使う。

『E・G・K、シスターモード発動！』

いつもの半透明のモニターに、私のステータスが浮かび上がる。
そこにはこう記されている。

名前…ルナ・ロファリエル

種族…人間

職業…獣の聖女

E・G・K…シスターモード（レベル85）

力…112

体力…215
魔力…550
知恵…580
器用さ…337
素早さ…452
運…237
物理攻撃スキル…なし
魔法…回復系魔法、聖属性魔法
特技…【祝福】【ホーリーアロー】【自己犠牲】
ユニークスキル…【E・G・K】【獣言語理解】
加護…【神獣に愛された者】
称号…【獣の治癒者】

ヒーラー職のシスターで、私は回復魔法を選択しバルロンにかける。すると、見る見るうちにバルロンの足の傷が塞がっていく。【獣の治癒者】の称号を持つ私を使うと、獣に対して回復魔法の効果が高まるのだ。驚いたように声を上げるバルロン。

『ぐぬ！あの傷があつという間に！なんとということだ!!』

信頼してくれたのか、バルロンは私にしていた丸薬を勢いよく口にする。そして、彼は顔をしかめた。

『うぬ！これは苦い、もう少しましな味にはできんのか!?』

『贅沢言わないで！今はそれどころじゃないですよ。まったく、大きな体をして情けないわね』
『何を？ 生意気な小娘だ!』

私に怒られて、バルロンは目を白黒させる。だって、本当に今はそれどころじゃないし。

この際、化膿止めの丸薬は後でもよかったのに、勝手に食べちゃったから……

小さくため息を吐く私を尻目に、雄々しい姿ですつくと立ち上がるこの森の主。

『バルロン様!』

メルが驚いた様子で声を上げた。スーヤルーも泣き顔から笑顔に変わる。

『治ったの？バルロン様!』

『ルナ！凄い!!』

自分たちを守ってくれる頼もしい存在の復活に、二羽の羊うさぎたちがぴよんぴよん辺りを飛びまわる。

リンは私の肩の上に駆け上がって胸を張った。

『でしょ！ルナはとっても凄いんだから!』

バルロンは私の傍に立つと前方を見つめた。

『小娘、一つ借りができたな』

『いいよ。さあ、さつさと敵を倒しちゃいましょう』
『うむ、分かっておるわ!』

私がさつき【素敵】で感じた気配は、もうすぐ傍まで来ているはず。

『——そうだわ! シスターの特技を使えばいいのよ』
『なんだそれは?』

「すぐに分かるわ。特技【祝福】を選択!」

〈【祝福】を選択しました。一時的に仲間のステータスが飛躍的に高まります〉

バルロンとシルヴァンの体を光が包み込む。

『ぬお! なんだこれは! 力が漲るぞ』

目を見張るバルロンの横で、シルヴァンが叫んだ。

『ルナ! バルロン! 来るぞ!』

『ええ、二人とも気をつけて!』

『分かっておるわ!』

私の言葉に頷くバルロン。次の瞬間——

凄まじい咆哮を上げて、目の前の茂みから何かが飛び出してきた。

見ると、双頭の巨大な黒い犬だった。

密猟者たちが使っている猟犬に違いない。ダブルヘッドハウンドと呼ばれる強力な魔獣だ。

魔獣は唸り声を上げて、迷うことなくバルロンに向かって走ってくる。悲鳴を上げるリンたち。

『ぬうおおおおお!!』

バルロンは咆哮を上げながら、正面から黒い魔獣と激突する。

物凄い衝撃音と共に、ダブルヘッドハウンドは木に吹き飛ばされた。

シスターの【祝福】の効果がきめんだわ。猟犬の目は驚愕に見開かれている。

『馬鹿な……まだ傷は癒えてないはずだ!』

『あり得ねえ、弱ってる頃合いだと思っただのに、前よりも強くなってやがる!』

猟犬の二つの首が、自分たちの体を押さえつけているバルロンを忌々しげに睨んでいる。

『生憎だったな小僧! こっちには心強い女神がついておってな』

『うあああ! なんだこいつは!!』

叫び声のした方向に目を向けると、シルヴァンが密猟者の一人の体を押さえつけていた。

残りの二人が、手にした弓をシルヴァンに向ける。でも、次の瞬間、その弓は密猟者の手から弾かれていた。

私の右手には、白く輝く魔法の弓が握られている。そこから放たれた聖なる矢、ホーリーアローが彼らの弓を弾き飛ばしたのだ。

シスターの特技で、数少ない攻撃手段である。エフェクトが格好よくて、前世ではいつも使ったのよね。

私が助けなくても、シルヴァンのことだから残りの密猟者もやつけただろうけど、シルヴァンに弓を向けている姿を見たら咄嗟に体が動いてしまった。

私の弟に弓を向けるなんて許せないもの。

「くっ！ どうして人間がこんなところに！」

弓を弾かれた腕を押さえながら、そう叫ぶ密猟者たち。

「残念だったわね！ この国では密猟は重罪よ、役人に引き渡すからそのつもりでいて！」

もしも本当にジェラルドが彼らに密猟を命じたのなら問題になりそうだが、このまま見過ごすなんてできない。

放っておけば、同じことを繰り返すに違いないんだから。

バルロンたちと連携し、密猟者とその猟犬を倒して、私はほっと一息吐く。

その時、シルヴァンが切羽詰まった調子で叫んだ。

『しまった！ ルナ、敵はこいつらだけじゃない、いつの間にか囲まれてるぞ！』

『え？ そんな！』

私は慌ててシスターからレンジャーにモード変更する。

すると【索敵】に一斉に反応が浮かび上がった。シルヴァンが言ったとおり、周囲をすっかり囲まれている。

まるでさつきまで、気配を隠していたかのように。

『来るぞ！ ルナ』

唸り声を上げるシルヴァンに、私も身構える。

でも……

茂みを抜けてやって来たのは、密猟者とは思えない整った身なりの、端正な獣人族の騎士だった。あんまり素敵なので、少し見惚れてしまったほどだ。

燃え上がるような真紅の髪を靡かせて、颯爽とこちらに向かって歩いてくる。髪の色にピッタリの赤い軍服がとてもよく似合っていた。

長身の彼の耳の形から察するに、獣人族の中でも珍しい獅子族かしら？

本での知識が殆どだから確信は無いけど、堂々として凛々しいその雰囲気から、間違いない気がする。

彼が現れると、周りからも沢山の騎士たちが姿を現した。

最初に現れた紅髪の騎士が辺りを見回して言う。

「これはどういふことだ？ 我らが来る前に密猟者どもが倒されているとは」

「はい、殿下。おかしな話もあるものです」

殿下？ 今あの人、殿下って呼ばれていたわよね。

聞き間違いか。こんなところに一国の王子がいるはずないものね。とにかく、この人たちは密猟者じゃないみたい。

きつと密猟者を追いかけて来た人たちだろう。私はホッとして彼に声をかけた。

「あ、あの、貴方たちは？」

私の言葉を聞いて、その紅髪の騎士は、何故か物凄く冷たい目でこちらを見た。

「お前たちを捕らえに来たに決まっているだろう？ まさか密猟者の中に女がいるとはな」

え？ どういうこと？ もしかしてこの人、私を密猟者と勘違いしているの？

彼は困惑する私の腕をしっかりと掴む。

「ちよっと、何するの!？」

前言撤回！ ちよっと素敵だと思ったけど、なんなのこの人。人の話も聞かずに決めつけて、失礼だわ！

私は腹が立って彼に抗議した。

「ちよ、ちよっと待って。私は密猟者なんかじゃないわ！」

「いいから一緒に来い。言い訳は後でゆっくりと聞いてやる」

「ちよっと、ふざけないで！ 放してよ！」

私の腕をぐいぐいと引つ張る男に、私はカチンときて言い返した。

白い猿のジーンが木の上でみんなに向かって叫ぶ。

『大変だ！ ルナが密猟者と間違えられて連れてかれちまうぜ！』

それを聞いてリンが、私の腕を掴む男の体に駆け上ると、小さな手でその頬を何度も叩く。

『バカバカバカあ！ ルナは悪くないんだから!!』

すぐにメルもそれに加わる。

『そうよ、ルナさんを放して!』

羊うさぎたちも、丸まった角で彼の足に頭突きをした。

『このお!』

『ルナをいじめないでえ!』

バルロンも大きな体で私を守るように傍に立つ。

『ルナは我らの恩人、密猟者などではない!』

シルヴァンは私の前に立って牙を剥く。

『なんだよ、こいつ！ 遅れて来たくせに偉そうにさ!』

そんなリンたちの様子を見て、傍で控えていた騎士の一人が進み出る。

そして、私の手を掴む紅髪の男に声をかけた。

「アレク様、この女性は密猟者ではないのでは？ まるで動物たちが彼女を守っているように思えます。それにそんなことをするレディには見えませんが」

「れ、レディ？」

そう呼ばれて私は思わず顔が赤くなる。

私を『レディ』と呼んだ男性は、私の腕を掴む失礼な男とはタイプが違う美男子だった。知的で優しいような笑顔と、私のことをレディって呼ぶその紳士的な態度が素敵な人だ。水を思わせるほど青い髪が美しい。

髪の色と獣耳の形から多分、青狼族せいろうぞくじゃないかと思う。確か獅子族ししぞくと同じで獣人族の中でも珍しい種族だったはず。ちなみに、獣人族には動物の血が入っているが、彼らは動物の言葉を理解することはできない。

とはいえ、こんな美しい二人が街を歩いていたら、振り返らない女性はいないだろう。

まあ、一人はかなり強引な男だけどね！

よりにもよって、私を密猟者扱いするなんて酷いわ。みんなで頑張って退治したんだから！
ジロリと失礼男を睨みつけると、彼はリンを摘まみ上げてジッとその顔を見る。

「動物が守っているのだと？ 本気で言っているのか、ルーク」

アレクと呼ばれた騎士に摘まれたリンが叫ぶ。

『何するの、放してよ！ バカバカ！ 大っ嫌い！』

必死に暴れるリン。私は慌ててアレクに詰め寄る。

「やめて、リンを返して！」

「リンだと？ この白耳リスのことか」

「そうよ！ 私の大事な友達なんだから」

赤毛の騎士は、呆れたような顔で私にリンを手渡す。

「何が友達だ。まったく、おかしなことを言う女だ」

リンはベソをかきながら私にしがみつく。

『ふえええん！ ルナ、怖かったよお』

『ごめんねリン。私のためにありがとう』

『えぐっ……だって、ルナが連れて行かれちゃうって思ったんだもん』

泣きじゃくるリンを見て、メルとスーたちがアレクを見上げて叫ぶ。

『酷いわ！』

『リンをいじめたなあ！』

『大っ嫌い！』

そんな中、アレクは私を一瞥すると暫く考え込んで言った。

「確かに、こんなおかしな女が密猟者だとも思えんな」

言うに事欠いて、おかしな女なんて言い方がある？ 私は顔をしかめて彼に詰め寄る。

「何よ、ほんとに失礼な人ね！ おかしな女ってどういう意味？ そんな風だから動物たちに嫌われるのよ。みんな貴方のこと大嫌いだって言ってるんだから!!」

「な、なんだとお前、俺を誰だと思ってる！」

「そんなの知らないわよ！ 私だって貴方のことなんか大っ嫌い！」

一瞬たじろぐ失礼男。それを見て、ルークさんが声を抑えながら笑っている。

「ルーク！ お前、何を笑っている」

「ふふ、ふふふ。すみませんアレク様、でもおかしくて。女性の憧れの的であるアレクファート殿下に、面と向かって大嫌いだなどと仰る女性がいるとは。今の殿下の驚いた顔を見ましたらつい」

え？ アレクファート殿下……今そう言ったよね。

嘘でしょ、もしかしてこの失礼男って。

さっき、別の騎士も殿下って呼んでた気がする。聞き間違いだと思ってたけど……

私はサッと顔が青ざめるのを感じた。

どうして？ あり得ないわ。もしそうなら、なんでこんなところにいるのよ。